



祝 辞

財団法人日本卓球協会
会長 飯田 亮

福島県卓球協会が創立70周年を迎えられ、記念誌の上梓とともに、盛大な記念式典が開催されますことに対し、日本卓球界を代表して、心からお祝いを申し上げます。

昭和4年の創立といえ、県卓協（県卓連）としては日本で最も古い歴史を持つ、いわば日本卓球会の草分け的存在の協会といえます。

目黒宗英初代会長以来、歴代の会長はじめ、役員の方々に連綿と受け継がれてきた“卓球愛”が、この福島県卓球協会の輝かしい伝統を築きあげたものと深く敬意を表するものであります。

この“卓球愛”がエネルギーの源泉となって、日本の球史に燦然と輝くきら星を育んだことは、言うまでもありません。

昭和29年、第21回世界選手権ロンドン大会では、後藤英子選手が女子団体で優勝をしたのをはじめ、昭和42年、第29回世界卓球選手権ストックホルム大会に日本代表として参加した反畑秀彦選手、平成の世になってからは、各種国際大会で大活躍した藤田由希選手……等々、名選手を輩出していることで証明されていると存じます。

福島県の卓球で忘れられないのは、確か、後藤寿二会長時代でしたか、飯坂温泉で行なわれていた全国オープン大会であります。当時、全国に先駆けて開催された大会で、全国から腕自慢の選手が大勢参加し、一流選手への登竜門とも言える価値ある大会でありました。

もうひとつは、“ふくしま国体”の開催が決まってからの、ジュニア層の強化には目を見張るものがございます。その華々しい足跡は、日本の記録に永遠に残されるであります。

いま、西郷徹夫会長、伊藤秀行理事長のもと、福島県卓球協会がこの記念すべき70周年をひとつの節目として、更なる前進を遂げられますよう、ご期待申し上げますと同時に、これまで立派な伝統を築きあげてこられた先輩諸氏へのねぎらいと、今後ますますのご健勝を祈念し、祝辞とさせていただきます。

平成11年7月吉日



ごあいさつ

福島県知事 佐藤 栄佐久

福島県卓球協会設立70周年誠におめでとうございます。

貴協会は、県の競技団体の組織としては最も早い昭和4年に設立され、以来、年々発展の一途をたどり、今日9,000名に及ぶ登録者がクラブや学校、実業団など幅広い分野で活動するなど隆盛を見ております。これもひとえに関係者の卓球に寄せる情熱と並々ならぬ御労苦の賜と深く敬意を表する次第であります。

本県の卓球競技の歴史は、明治の末期頃から福島市を中心として行われましたピンポンゲームに始まり、大正時代には、町内や職場の愛好者でクラブが誕生し、対抗戦が盛んに行われるようになったと伺いました。

その後、昭和25年の第5回国民体育大会での高校女子の団体第3位や、その後の国際大会や全国大会などで、輝かしい戦績を残しております。

特に、第50回の「ふくしま国体」においては、成年女子2部の優勝を始め、各種別の健闘により、競技別総合成績第2位に輝き、本県の男女総合優勝に大きく貢献されました。

御尽力をいただきました関係の皆様に改めて御礼を申し上げます。

さて、県体育協会といたしましては、ふくしま国体を契機とし、競技力の向上と生涯スポーツの普及・振興を2大目標として掲げ「スポーツ福島」確立のため、各種事業を推進しているところでありますが、貴協会におかれましても、なお一層卓球競技を通して、本県のスポーツ振興に御尽力くださるよう御期待申し上げます。

終わりに、「福島県卓球協会設立70周年記念誌」が発刊されましたことを心から御祝い申し上げ、貴協会のますますの御発展と関係の皆様のご更なる御活躍を祈念いたしまして、祝辞といたします。



「福島県卓球協会設立70周年記念誌」 発刊に寄せて

福島県教育委員会教育長
杉原 陸夫

福島県卓球協会設立70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。
貴協会は、昭和4年に設立されて以来、本県における卓球競技の普及・振興に力を注がれ、ここにめでたく設立70周年を迎えられました。

これもひとえに、協会設立に尽力された方々をはじめとして、長年にわたり運営にあたられました関係の皆様のご御努力の賜と深く敬意を表します。

また、この記念すべき節目の年にあたり、記念誌を編纂し、貴協会の貴重な活動の証を後世に残されますことは誠に意義深く、心からお祝いを申し上げます。

卓球競技は、国際大会で活躍する選手を数多く輩出するなど、日本のお家芸といわれた競技であるとともに、幼児から高齢者に至るまで幅広い年齢層の多くの人々に親しまれております。

本県におきましても、貴協会の指導者の皆様のご熱意と努力により、各種の全国大会等で多くの選手が好成績を収めております。

特に、平成7年に開催されました「ふくしま国体」では、成年女子2部で優勝したのをはじめ、5種別で入賞し、競技別成績第2位の快挙を成し遂げ、本県の天皇杯獲得に大きく貢献されました。

ここに、改めて関係の皆様のご長年にわたるひたむきなお取り組みに対しまして、深く敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げます次第であります。

どうか、関係の皆様には、この70周年を契機として、ますます一致団結され、本県の卓球競技の更なる普及・振興並びに競技力の向上に尽力されますとともに、本県スポーツの振興に御支援くださるようお願い申し上げます。

終わりに、貴協会のますますの御発展をお祈りいたしましてお祝いのことばといたします。



福島県卓球協会 設立70周年をお祝い申し上げます

日本卓球株式会社 代表取締役社長
向原 一雄

福島県卓球協会が、平成11年を以て、設立70周年を迎えられます事を心からお祝い申し上げます。私が福島県に初めて足を踏み入れたのは確か昭和21年の頃と記憶しております。先ず会津若松を訪問いたしました。その時にお目にかゝったのは会津卓球協会の岩田さんと平出さんでした。まだ敗戦直後の混乱期にも拘らず大へん御世話になりました。その時は卓球の話は余りせずに、会津の歴史について、いろいろと拝聴いたしました。

その後、東北卓球連盟が福島の後藤壽二さん、青森の佐藤光男さんを中心に設立され、福島でも歴々、東北選手権大会や東北高校選手権大会が行われ、県の卓球も盛り上がり各支部の組織も充実し優秀な選手を続出し東北の黄金時代を築いたのは御存知の通りです。

更に昭和20年代の後半からは、飯坂温泉杯大会も行われ、有意義な楽しい大会でした。御存知かと思いますが、東北にはオープン大会として岩手県の花巻温泉に北日本卓球大会が行われて居りまして平成10年で67回を迎えて居ります。これに対して飯坂温泉杯がスタートした訳です（我社のサンフレンドチームも参加させていたゞきました。）大会は永続させず残念でしたが、この大会は福島卓球に刺激を与えたものと思います。

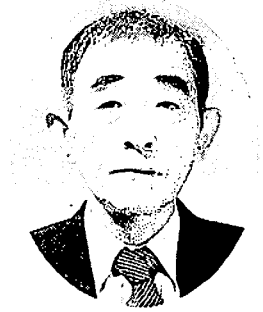
何と云っても飯坂の後藤壽二さんは福島県の卓球界のみならず、東北の卓球界の大功労者であります。その頃、大会では後藤さん始め、半谷敬寿さん、鈴木重郎治さん、笹山進さんとも、よくお目にかゝりました。又、多くの役員の方々が協力され今の福島卓球を築いた事は忘れられません。後藤さんは文子さん、昭子さん、英子さんの後藤三姉妹と云われる立派な選手を育て上げられました。

そして県卓球界への貢献のみならず、日本代表チームの合宿などにも大いに協力されて日本の卓球界にとっても忘れられない存在です。日本代表チームの飯坂合宿では名古屋の後藤鉦二さんとも屡々お会いして色々卓球の話がされた事でしょう。名古屋の後藤さん、福島の後藤さん共に今は亡く、痛惜の念一しおです。

その後の福島県卓球協会は先人の遺志を継いで、三浦勝美さん、宇賀神喜嗣さん、土屋弘さん、大橋榎さん、佐藤昭典さん、松崎俊一さん、西郷徹夫さん、平石家治さん、山崎勲さん、信沢要さん、渡部長二さん、二木康視さん、深谷秀三さん、伊東守信さん、浜名秀雄さん、伊藤秀行さん、鈴木一吉さん其の他多くの方々の団結と御尽力によりまして、立派に運営されて居ります事に敬意を表すると共に感謝の念に堪えません。

特に平成7年に須賀川市で行われた第50回国民体育大会の大成功には平石家治さんを先頭に須賀川市卓球協会の皆さんの大へんな御尽力に依るもので卓球福島の名を高らしめたのは記憶に新しいことです。

福島県は東北に属して居りますが関東とも境を接して居ります。東北の気風を持ち乍ら関東の風も入って独特の風土を形成しております。穏やか誠実の中にも凛とした気概が感じられます。今後も皆様の「和と努力」によりまして、福島卓球が一層充実され、世界にはゞたく優秀な選手を輩出される事を期待しております。



ごあいさつ

福島県卓球協会

会長 西郷 徹夫

福島県卓球協会が、昭和4年に設立されてから本年をもって70周年を迎えました。

その間、幾多の歴史を刻みながら、協会の発展のためにご尽力くださいました歴代役員のご苦労に心から敬意を表しますとともに、これまで本協会のためにご支援とご指導を賜りました関係各位に対しまして深く感謝申し上げます。

本協会では、この記念すべき年にあたり、70年の歩みを振り返って、多くの先輩諸氏のご努力を偲び、その功績を後世に残すため、このたび記念事業の一環として「福島県卓球協会設立70周年記念誌」を発刊する運びとなりました。

本協会の設立から70年が経ちましたが、卓球の歴史を辿ってみると、本県の卓球はさらにさかのぼり、古い資料によりますと、明治の末期にはすでに福島・飯坂地方の子どもたちの間に遊びとしての「ピンポンゲーム」が普及しはじめ、大正時代から昭和の初期にかけて、学校や職場で愛好者グループが誕生し、県下各地で卓球の対抗戦が盛んに行われるようになったという記録があります。

昭和4年に、日黒宗英初代会長が、福島市の卓球連盟を母体として、福島県卓球連盟（現在は、協会）を創設。その後も戦中・戦後の激動する混乱を乗り越え、連盟組織の確立と充実・発展に尽力されました。

昭和23年、全日本軟式選手県大会を福島市飯坂で開催したのを契機に、後藤寿二会長に引き継がれ本県の卓球がさらに大きく発展を遂げることになりました。

昭和25年、第5回国体では高校女子団体が第3位に入賞したのをはじめ、昭和29年代21回世界選手権ロンドン大会では、後藤英子選手（福島女子高校出身）が日本代表として、女子団体が優勝を飾り、さらに昭和42年には、第29回世界選手権ストックホルム大会に日本代表として活躍した反畑秀彦選手（相馬高校出身）、平成の時代になってから、三浦勝美第4代会長（現：名誉会長）の卓越した指導のもとで育った藤田由希選手と今福久美選手（三浦卓球クラブ出身）が各種国際大会で活躍するなど、多くの名選手を輩出するまでにいたっております。

さらに、特記すべきことは、平成7年に開催された第50回「ふくしま国体」で、女子2部の優勝をはじめ、5種別に入賞、総合成績第2位を獲得し、本県の男女総合優勝に大きく貢献できましたことは、本県卓球史上に輝かしい1ページを飾る快挙でありました。

これまで久しく低迷を続けてきた本県卓球の競技力が、「ふくしま国体」の開催を契機に、全国レベルにまで向上して参りましたことは、誠に心強い限りであります。

同時に県民のスポーツに対する関心が一段と高まる中で、老若男女だれでも手軽に楽しめる卓球が人気を集め、各地で卓球をエンジョイする愛好者が増えつつありますことは誠に喜ばしい限りであります。

卓球も勝敗を競う競技型から、卓球そのものを楽しみ、自己実現を求める方向へと変化しており、人々のライフスタイルに合った継続的な活動を求める傾向が強くなってきております。

これは、21世紀への新しい一つの潮流であり、そのニーズにどう応えていくかが迫られております。

本協会といたしましては、この70周年の節目にあたり、全国レベルにある競技力をどのように維持・向上させるかが大きな課題ではありますが、同時にまた生涯スポーツとしての卓球競技の普及振興にも、これまで以上に積極的な取り組みが必要であると考えております。

かねてからの懸案でありましたこの記念誌の発刊が、多くの先輩諸氏の業績を偲び、後に続く人たちが「温故知新」を座右の銘として、21世紀の本県卓球界を拓く一つの指針となることを念願するものであります。

最後になりましたが、本記念誌の発刊にあたり、関係の皆様にご祝辞を賜りましたことに心からあつく御礼申しあげますとともに、玉稿をお寄せくださいました関係の皆様のご支援とご協力に深く感謝申し上げます。

終わりに、記念誌の発刊を機に今後とも卓球を愛好する同志とともに、協会のさらなる発展のために、力を尽くして参る所存でありますので、関係各位におかれましては、今後ともなお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。記念誌発刊のあいさつといたします。



発刊に寄せて

福島県卓球協会名誉会長
三浦勝美

福島県卓球協会が設立されて以来、幾多の試練を乗り越え、このたび70周年を迎えることになりました。その間、先輩諸氏のご尽力、ご支援に感謝申し上げますとともに、歴代役員の方々のご苦勞に心から敬意を表する次第です。

これを機に、70年の足跡を振り返り、これまで築きあげてきた数々の業績を分析、検討し、21世紀に向かっての活動の糧とすべく、記念誌が発刊されることは、誠に意義深いものがあると存じます。

福島県卓球協会発足の年月日については、種々推測されますが、昭和5年1月発行の「福島卓球界」の会則によれば、「本則は、昭和4年12月1日よりこれを施行する」とあるので、この日をもって発足したものと考えられます。

その当時の福島県卓球界は、会津・相双・福島・須賀川（牡丹杯 昭和9年に第1回）における地区大会が中心であったように思われます。

戦争で一時、中断された卓球界も、昭和22年に、福島県卓球連盟として再建され、昭和23年に全日本軟式卓球選手権大会が福島市飯坂町で開催されたのを契機に、組織の改変が行われました。

昭和30年には、福島県高等学校体育連盟卓球部が、昭和47年には、福島県中学校新人卓球大会（県卓球連盟主催）が開催され、組織の充実と活動の活性化が進められました。

昭和50年代から平成年代にかけて、各種の全国大会が郡山市を中心に開催され、組織の更なる充実と競技力の著しい向上がはかられました。平成7年、「友よほんとうの空にとべ」のスローガンの下に開催された「ふくしま国体」に結集された熱い心と力は、われわれにやれば出来るんだという自信と将来への可能性を与えてくれたと思います。

この記念誌の発刊が21世紀に向け、夢と希望に燃えている若い世代が空高く羽ばたくための一助となればと念願する次第です。